

修了生・卒業生代表 謝辞

本日は私たちのために、このような盛大な卒業式典を挙げていただき、誠にありがとうございます。
先ほど山極学長の告辞をはじめ、ご来賓の方々より身に余るご祝辞を賜り、重ねてお礼申しあげます。
先生方のご祝辞を拝聴しておりますと、佛教大学生として勉学に励んだ日々が走馬灯のように脳裏に
来去いたします。そして本日無事に卒業を迎えることができたことを、一同、心より喜んでおります。

本日、ここに、271名の修了生・卒業生が本学から旅立ちます。通信教育課程の学生の多くは働きなが
ら、様々な時間の制約の中で勉強に励んで参りました。それは孤独な学びであり、自分との闘いでした。

私事ですが、大学から送られてきたシラバスや学習の手引書を見る事も無く、大学からのオリエンテ
ーションの案内が届くのを待っていましたが、何の連絡もありません。不安になり学習会に出かけ、サ
ポーターの先生のお話を聞き、主体的に学ばなければ前進しないことを知りました。私は3年次へ編入
学しましたが、四十数年前の学生時代と同じイメージを抱いていましたので、改めて通信教育課程で学
ぶことの厳しさを身をもって痛感した次第でした。自分は学び続けることができるのかと、不安が増幅
しましたが、スクーリングや学習会で出会った先生方や諸先輩方、職員の皆様のご指導で不安も消え、
学ぶ喜びが少しずつ身に付いてきました。しかし、思うように勉強が進まない時は、机から離れる時間
が多くなり、当初の学習計画を先送りすることもありました。そのような時ある新聞の読者欄が目
に止まりました。そこには定時制高校で学んでいる生徒さんの短歌が載っていました。その短歌は「夜学
終え、包丁仕事で切るものは、ナスとキャベツと怠情の心」と言うものでした。この歌を詠んだ人は、料
理人さん、または主婦の方かもしれませんが、働きながら学ぶ大変さを克服した生徒さんの姿があり
ました。学ぶことの厳しさは、私たち通信教育課程の学生と同じであり、私もこの生徒さんのように
斯ありたいと痛感しました。怠け心が頭を擡げてくると、この歌を口ずさみながら机に向かいました。
この短歌は、その後の私の背中を押してくれる応援歌となりました。

スクーリングでは素晴らしい学友との出会いもありました。その学友から「卒業は何年計画か？」と
尋ねられたことがありました。私は3年次編入なので2年間で卒業予定と答えましたら、学友は「せ
つかく大学に入ったのだから2年で卒業するのではもったいない。じっくり勉強し、研究成果を出した
ほうが良い」とアドバイスをいただきました。私はその話を聞き最初は大変驚きましたが、その学友の勉
学に対する高い意識を知り、学ぶ意義を改めて考えさせられました。

佛教大学通信教育課程は1953年に設置され、六十有余年の輝かしい伝統を受け継ぎながら、学びを支
援し続け、有能な学生を社会に送り出してこられました。私たちは学びの目的や目標は様々ですが、学
びを通してよりよく生きていきたいと強く願って通信教育課程の扉を開き入学しました。しかし、学
ぶことは容易なことではなく様々な困難に遭遇しましたが、それを克服し本日を迎えることができました
のも、ひとえに先生方や職員の皆様、諸先輩方の支援や、素晴らしい学友との出会い、そして影になり
日向になり学びを支えてくれた家族があったからこそでした。語り尽くせない感謝の気持ちで一杯です。
本当にありがとうございました。

最後になりましたが、本日ご臨席の皆様の、これまでのご指導ご支援に対し深甚の感謝を申し上げ、
日本の通信教育課程の雄たる佛教大学のますますのご発展をご祈念いたしまして謝辞とさせていただきます。

平成27年3月25日
修了生・卒業生代表
歴史学部 歴史文化学科
森岡 弘典